

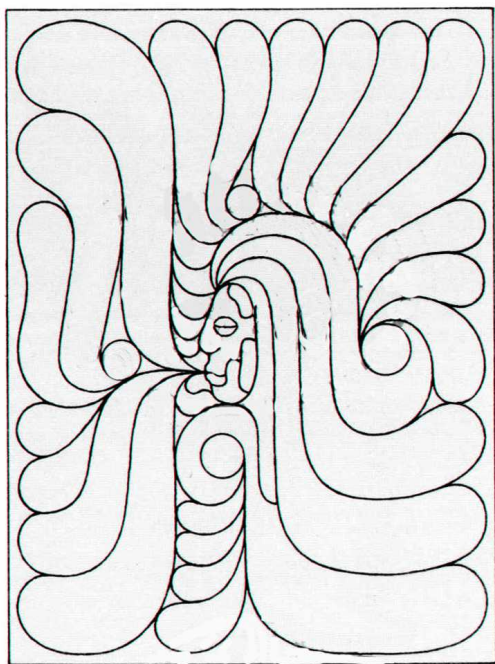
大きな鳩の影

東 峰 夫



影の鳩なごハ

東 峰 夫



中央公論社

大きな鳩の影

定価一二〇〇円

昭和五十六年一月二十日初版印刷
昭和五十六年一月三十日初版発行

著者 東峰夫

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替 東京二―三三四

◎一九八一 検印廃止

大きな鳩の影

7

翼の手

61

山頂の王

81

黄金の蛇の谷

103

雲の木紙の木

125

おんな自転車どろぼう

145

北方巡礼

169

丘からの眺め

189

木の上の少女

209

アメリカの聖なる森林公園

229

親子問答

253

裝幀 深山護之助

大きな鳩の影

大きな鳩の影

波

入江があった。風で小波が立っている。

一人の漁師が網をおろしてはむなしく引きあげている。

モーターボートが二隻、大波をたててやって来て、漁の邪魔になるのもかまわずに何かを始めた。浜の杭に細いロープの一端を結びつけて、一隻のボートが沖合いまで出ていくと、もう一隻のボートは張りわたされたロープの上下に出来る波の高さを測るのだ。

彼らは気象台の職員なのか、波浪注意報をだすための仕事をしているらしかった。

漁師は一匹の魚もいままに引きあげて、船を走らせた。船腹には小波が軽やかに当たっていた。

「これがさざ波だ！」と誰かが説明して言った。「走航しているかぎり、この波はある！」

沖に出ると、大きなうねりの波が来はじめた。「これが波、普通なものだ。これによって船は揺れる！」と、その声は言った。

「しかし、もっと大きな波もある。それは津波だ。船が波によって揺れるなら、津波の時は一体どうなるのだろうか」

わたしはびっくりして目を覚ました。

戸を開けると彼が立っていた。同郷の男カンナ。女は連れていなかった。

「おれたち別れたんだ。喧嘩して、もう駄目だ！」と、部屋に入ってくるなりそう言った。

わたしはただあきれるばかりだった。結婚しましたと報告しに来たのは、ほんの二、三日前のことではなかったのか？　それがもう別れますとはどういうことなのだ？

女は彼のために喫茶店で働いているらしかった。彼は彼女に養ってもらいながら、小説を仕上げようとしていた。それもいいだろう、とわたしは思った。支えてくれる者が見つかったとは幸せなことだ。小説を書いて認められれば女にもちゃんと報いることが出来るだろう。

しっかりやりなさいと二人を見送ったのに、もう別れるとは自分がばかにされたようで腹が立った。この分だと、明日になればまた、別れないことにしました、と言って来るかもしれないので、わたしはふんふんと鼻で聞いていた。

「あいつ、きつと来るかもしれないよ。相談しに行くと言ってたから。あいつならきつと来るよ。ふらふらっと男から男へと、すぐに乗りかえる女なんだから」

わたしは、えっ、と驚かされてしまい、変に心が揺らいでしまった。

結婚しますと二人で言いに来た時から、わたしは彼らの前途が不安だった。

ただでさえ小説を書くことは難しいのに、かつて彼はわたしにこう言ったことがあった。

小説を書くことは空無である者が、より大きな空無をつくることが出来るのを知って、それをつくりとする営為だ、と。

そんな考えで、どうして人に認められる小説を書くことが出来るだろう。女とも喧嘩して、結局は別れることになるのではないのか、わたしは不安だった。

彼の話によると、彼女との出会いはアルバイトの帰りに、電車の中で童話を読んでいる女に声をかけ、コーヒー店に誘いスナックに誘いして、酒の勢いをかりて、ついにアパートにまで連れこんだということらしかった。

正業についていない男との生活がうまくいく筈はない。同棲していれば子供だってすぐに出来るだろう。「墮ろしちゃまえ!」「でも、お金が……」「金はつくる!」「どうやって? 原稿は白いまんまじゃないの!」

二か月ほど前のことだが、ジーンズに下駄ばきという身なりの女が訪ねてきた。

「カンナさんの居所を教えて下さい」と女は言った。いきなりのこと、わたしにはどういうことなのか分からなかった。わたしが彼のアパートの住所を言うと、「いえ、カンナさんはそこかしらなくなったんです!」食事もうくすっぽしていかないような、やつれた顔だった。鼻にも額にも汗をかいている。このままでは行き倒れるかもしれない。あいつめ、ひっかけたんだな、わたしは直感した。そういえば彼はこしばらく顔を見せなかった。一週間に一度は遊びに来ていて、最終電車を逃がすと泊っていったりに、それがぶつとりと来なくなっていた。もう半年にはなる、とわたしは彼女に言った。

女は納得して戻って行った。肩にインド風の厚織りの布袋を下げて、逼迫した表情のまま去って行ったのだ。

その時は郷里に逃げかえっていたんだと彼は説明した。逃げたまでにはいいが、途中で彼女が可哀相になって、親から金を借り、その足で戻って来たのだが、すぐにまた喧嘩で、この半年間、心が安らいだことがないと言った。わたしは出来るだけ二人を突き放すことにした。

わたしは駅前の食堂に夕食を食べに行った。それからいつものように風呂屋に寄った。石鹼も手拭いも預けてあったのだ。

湯煙の中にマイクがいた。やあ、と言ってわたしは彼のそばに坐った。彼はタオルも石鹼もなしでやって来て、パンツをタオルがわりにして、体をこすっていた。風呂で会うたびに石鹼を彼に貸した。

「有難う、いや、タオルはいらない。君、分かるだろ？　こんなふうにしてパンツを使えば洗濯もできちゃうんだよ」

ある日、白い肌の大男が迷いこんできて、うろろうしていたので声をかけた。それがマイクだった。二十五歳、ハワイ出身。話してみて分かったのだが、彼は気のいいヒッピーだった。

風呂からあがると、マイクは裸のまま、煙草を吸ったりしていた。二人は並んで映画のポスタ

ーを眺めた。

「この映画、見たか？」と彼は言った。『風と共に去りぬ』のポスターだった。わたしはうなずいた。『ゴッドファーザー』というポスターもあった。今度はわたしの方が指差して聞いた。

「『風と共に去りぬ』の方は見たけれど、こっちは見てないな。マフィヤは嫌いなんだ」と彼は言った。

「日本にもマフィヤはいるんだろう？」これがそれだと言ってわたしは『山口組三代記』というポスターを示した。

彼はパンツなしでズボンをはいた。

「近いうちにアメリカへ帰ることになった、それで、君に紹介したい人がいるんだ、フサコだよ。会ってみてくれないか、いい子なんだ」とマイクは言った。

「表に立っているだろう。そこだ、ほら」

三人は濡れた髪のままコーヒー店に入った。マイクは郷里に帰るので、愛人をわたしに押しつけようとしているらしい。

新宿の書店に勤めている、と女は言った。十九歳。顔にはまだあどけなさが残っていたが、体つきはアメリカ人の恋人を持つだけあって、成熟していた。

「ところで君はどんな仕事をしているか」とマイクが言った。建築会社で日当をもらって働きな